

## 図画工作教育講座 《 早い子 》

～取りかかってすぐに「先生、できました」ともって来る子への対応～

想定される場合は二つ

教師から見て未完成だけど、子どもは（その子の能力や感性では完成）と思っている場合

- ① 再確認の意味でもう一度「これで完成なの？少し遠くから、離れて作品を見てごらん」と、見つめ直させる。（完成と思っているので、これで変わることはほぼない。）
- ② 次の作品に取りかかるよう指示する。  
（同じパターンでは、子どもの意欲は湧かない）「今度は色鉛筆で、学校の絵はがきを作ってみよう」などと、用紙の大きさや描画材料を変えることで、興味・関心を掘り起こす。絵はがきは、小さい作品なので描く場所を変えれば何枚でも取り組める。



子どもも 未完成だけど早く遊びたい と思っている場合

- ① このまま遊ばせるのは厳禁。（他の子どもまで浮き足立つ）
- ② 次に作品を作るよう指示。（遊びたいから、この作品も早い）
- ③ 最後の手段は、計算ドリルや漢字の練習。（学級担任のメリット）



早く終わる子どもが続出する場合

原因 題材が自分の描きたいものでなかった

つまり、題材設定が子どものニーズと合っていない。

対策 描きたいと思う気持ち（意欲）が高まる題材設定をする。

そのために、今、どんなことに興味や関心を寄せているか把握する必要がある。

遊び時間に 例えばダンゴムシ集め、泥ダンゴづくり、一輪車乗りなど

学習では、リコーダー、ミシン、調理実習、逆上がりなど

ポイントはタイミング（初体験のわくわく感、成功体験の成就感）

\* 私は、早く終わる子に2つのパターンがあることに驚きました。子どもは完全に未完成だと思っていながらも「遊びたい」「もう飽きたからやりたくない」と思って、もって来ると思ったからです。その場合の対応しか考えていなかったなので、完成だと思っている子にどう対応するかを考えることは、重要だと思いました。

\* 私が小学生のときは、終わった人からグラウンドへ出てよかったので、雑に素早く描いていた記憶がある。これではまともに授業したというよりも子どもにノルマを達成させたといった感じであった。

この講座では、実際の授業について対応策を具体的に考えることができたため、私はこの講座で最も重要だと思った。

**支援する**（助言・励まし・賞賛・手助け）

飛び出す絵本の工作で紙の曲げ方が分からず困っている子どもに、教師の自作や友だちの作品を見せたり、「ここをこんなふうに曲げてごらん」と助言したり、何回やっても失敗している子どもには、手を添えて一緒につくることで成功への足がかりをつくってやる。そして、出来たら「よくやったね」「頑張ったね」と、ともに喜び、賞賛の声をかけることで子どもの意欲を高めていく。

**見守る**（見る・うなづく・声をかける・耳をかたむける）

幼児は、母親が傍に居るだけで安心して行動する。子どもも、活動しているときに教師が傍に居てうなずいたり、「いいね」と声をかけられたりするだけでも大きな励みとなる。

落ち葉や木の実で造形遊びをしたとき、同じ木の葉のワッペンを5個も作った子どもがいた。話を聞いてみたら「お父さんとお母さん、お婆ちゃんと妹と僕に分」とのこと。この場合、話を聞かなかつたら「同じものばかりじゃなく、もっと違うものを工夫したら」と注意するところだった。安易な助言で子どもの意欲を損なうよりも、子どもの思いを聞き分けることで「みんな、喜ぶだろうね」と見守る姿勢に徹することができる。

**指導する**（教える・伝える・注意する・諭す・促す）

指導のない授業はあり得ない。但し、指導を重視するあまりに教師が全てを教えては、子どもにとって発見の喜びも完成の満足感も味わうことはできない。

そのためには、個別指導の中で個々の子どもの活動を見つめながら、要所での指導となる。それは、子どもが技法や用具の使いかたを誤っているときに正しい使い方を教えたり、道具を振り回すなどの危険な行為を注意して諭したり、授業の目標から外れている子どもに本来の活動に立ち戻るよう促すことである。

さらには、子ども同士の交流を図ることにより、一人の子どもの発見が他の子どもたちに共有されていき、その結果として活動の様々な側面が学級全体に広がり、一人ひとりの子どもの学習の可能性が一段と大きくなる。

**教師の自己評価1 ～「先生、これでいいですか」と許可を求めに来る～**

子どもにいい絵を描かせたいあまりに、「この空の色はもっと薄く」「ここに白い雲を描き加えて」と教師の指示が多くなると、子どもは自分で感じることをやめて指示を仰ごうと教卓の前に並ぶ。

「これでいいですか（先生のお気に召すでしょうか）」と許可を求めるのではなく、「こうしたいけど、やり方が分からないので」と尋ねに来る子どもに個性の芽が育まれていく。

**教師の自己評価2 ～作品の裏にある名前を見ないと、誰の絵か分からない～**

「放任」では、どの子がどんな作品をつくっているのか分かるはずがない。逆に教師の指導過剰で、「金太郎飴」のように見分けのつかない作品でも、子どもの顔は見えてこない。子どもの製作活動に関わるほどに、作品から子どもの顔が透けて見えてくる。